

TPPに負けない酪農 それは成績表から

岡山県立高松農業高等学校 畜産科学科 大家畜専攻 3年 砂田 智子

「成績表」。地域や学校によって呼び方は様々ありますが、誰もがその1枚の用紙に一喜一憂した記憶があるでしょう。私たち高校生は今まさにその真っ只中にいます。中学時代には「この成績で行ける高校があるのだろうか」と悩んだことも昨日のことのようです。そんなとき、私は近くで寝ている愛犬の姿を見て「動物たちには成績がなくていいな…」といつも思っていました。

私が進んだ高校は高松農業高校畜産科学科。子供の時に牧場で乳牛を見てから、その魅力に取りつかれ、どうしても行きたい学校でした。高校に入学してからも毎日の牛の世話が楽しくて仕方ありませんでした。しかし、それだけをしているわけではありません。もちろん定期考査もあります。成績表だって毎回届きます。そんな考査期間中には担当牛のレイチェルの管理をしながら「お前はテストがなくていいな…」と声をかけたりしていました。

ところが、その牛たちには私たち以上に厳しい現実があったのです。あれは今年の1月のこと。いつものように放課後、牛舎に向かったときに聞こえた会話。「今月はまずまずだな」「でも、この牛はそろそろかな」先輩と先生との会話でした。しばらくその場に立っていた私は思いつ切って「何の話ですか?」と聞いてみました。

先輩からの答えは「うん。牛群検定。簡単に言うと牛たちの成績表かな。」それを聞いて私は衝撃を受けました。牛にも成績があるんだ…。見てみると、その成績表にはいろいろな数値が記されており、基準値と比較されていました。先ほどの先輩と先生との会話。「今月はまずまずだな」「でも、この牛はそろそろかな」とは「今月の牛たちの成績はまずまず良かったな」「でも、この牛は繁殖成績が悪く、そろそろ廃用牛として出荷を考えないといけないな」ということだったのです。牛たちの成績は単なる成績ではなく、その寿命に直結していたのです。

「あなたも一緒にやってみない?」誘われるままに参加した次の検定日。朝6時に登校して牛舎へと向かいます。いつもの朝の搾乳は先生方がしてくれていますが、牛群検定の際は生徒が責任をもって朝の搾乳をします。搾乳をするためのセッティングを行い、牛を搾乳待機場に追い込みます。3頭がミルクパーラーに入ると搾乳開始です。いつものように前搾りからユニットをつけるまでをすると、ボトルに牛乳が溜まっていきます。ボトルに溜まった牛乳は個体別のサンプル容器に入れます。また、家畜改良事業団に提出する専用の用紙に乳量、体重、そして餌の量などを記録していきます。夕方と同じ作業。そして、すべての項目を書いた家畜改良事業団に提出する専用の用紙を個体別の牛乳を入れたサンプル容器と一緒にボックスの中に入れます。バルククーラーの中の牛乳を2日に1回のペースで

取りに来てくれる集乳の方にボックスを渡したら牛群検定は終了です。いつもと同じ搾乳で慣れているはずなのに、とても緊張して手が震えました。

1週間後、検定結果が送られてきました。基準値と並んで表示されている本校の牛たちの成績は概ね良好でした。しかし、ミツバだけは前回の出産からすでに1年半を経過。乳量はわずか10Kg程度。何度受精しても種がつかない。私が見ても「もう限界かな…」と感じる結果でした。一緒に見ていた先輩が私に声をかけてくれました。

「砂田さん。牛群検定の結果はもちろん、牛たちの成績表なんだけど、実は飼育している私たちの成績表でもあるんだよ。」「牛たちの能力を引き出すのも、落とすのも飼育管理。」その話を聞いて私はゾッとしました。牛たちの成績には飼育者に大きな責任があるのです。「でもね」先輩はさらに続けます。「牛群検定の結果は牛の健康を把握するカルテでもあるんだよ」「牛たちの状態を正しく把握して次に生かすんだ。」私は「はっ」としました。「牛たちの能力が100%発揮できるように、データを駆使して飼育管理を考えよう。」それまで、「ただかわいい」だけで世話をして満足していた私に初めて生まれた目標です。それからは、毎日の飼育管理に加えて、牛群検定にも取り組んできました。

数ヶ月後、共進会で酪農家の方と出会いました。^{ひるぜん}蒜山で酪農をされている長恒さん。とても優しく、おもしろい方です。私ではありませんが、本校の生徒も2名ほど研修に行かせていただきました。長恒さんが飼育している出品牛はとても大きく、丈夫で、カッコいい、たくましい牛ばかりです。中国地方の共進会でも入賞をするほどの実力者なのです。私たちが飼育している出品牛たちとは、全く比べものになりません。長恒さんは自慢の牛を前に「育種改良に牛の能力を高めていくんだ」と熱く語られる一方で「TPPへの参加や飼料価格の高騰の中で、これからの酪農はもっと厳しくなる。」とも話されました。

中国地方の共進会が終わり、私たちも牛たちも一息ついていたある日、本校の牛舎に1人の女性が来られました。その女性は倉田さんという方でした。倉田さんは主に本校の牛舎の餌を管理してくれています。共進会のときも、私たちの出品牛の餌のアドバイスをしてくださいました。私がずっと気になっていた、特に体が小さいテイカについて倉田さんに相談にのってもらっていました。テイカの体つきは良いものの、周りの牛たちにいじめられて餌を食べられていなかったのです。「倉田さん。テイカはどうですか？」倉田さんのアドバイスを元に餌を与えてみた結果を私が訪ねると、倉田さんは驚いた顔で、優しく答えてくれました。「前の共進会のときより、かなり大きくなってるじゃん」「今度は、少しアルファを減らして、サイレージをあげるようにしてあげてみて。」「アルファを成牛になるまで、与え続けると選り好み癖がついちゃって餌を食べなくなるから、気を付けてね。」倉田さんは牛の体の大きさや体調を見て餌を決める、飼料投与のアドバイザーなのです。私はそんな倉田さんを見て、私の将来の姿を決めたように思えます。私もあんな人になりたい。いつの間にか、

倉田さんは私の「目標とする人物」になっていました。「最近、スーダンが高くなったから餌も考えなきゃね。」いつもの明るい顔から一転、少し曇らせた顔で、話してくれました。

TPPへの参加で、国土の狭い日本が諸外国と渡り合えるのか?しかも、私たちの命を紡いでいく食料の生産。農業に関しては私も断固反対です。しかし、反対を訴えるとともにその対応策を考えなければなりません。現在、45%しかない牛群検定加入率を向上させ、データに基づいた緻密な酪農経営を進める。ここに活路が見いだせるのではないのでしょうか?狭い国土の日本酪農が諸外国と対等に渡り合っていくためには、日本が得意とするデータに基づいた緻密な経営だと私は考えます。まさに、日本の野球がそうであるように。しかしながら、現在の牛群検定加入率はヨーロッパやアメリカなどの乳牛をしている国の中で最低水準だそうです。経験に基づいた飼育はもちろん重要です。私もたくさんの農家さんと出会い、経験に裏付けられた酪農技術はいつも驚きであり、私も一步でも近付きたいと思っています。この経験や技術に牛群検定というデータが合わされば、まさに鬼に金棒なのではないかと考えます。日本の牛群検定加入率80%をまずは目標としたいと思います。しかし、ただ、データがあっても、その利用が出来なければただの紙くずになってしまいます。その為に、検定結果をもとに各酪農家に助言をしていくアドバイザーの存在が重要になると思います。私は将来、「そうしたアドバイザーになりたい」と考えています。

長崎のハウステンボスの澤田秀雄社長は、長年赤字に苦しんでいたハウステンボスを僅か3年で黒字へと導いたことで有名です。ある日、テレビで澤田社長のインタビューを見たとき、次のようにおっしゃっていました。「どんな会社でも、収入を2割増やし、支出を2割削減できれば、再建できる。その為の、対策を私は講じていくんだ」わたしはそれを酪農にも応用できるのではないかと考えました。生産量を2割増加させる方法として、まずは能力の高い牛を作り出していく。その為の基礎的なデータとして牛群検定が活用できる。次に、高い能力の全てを発揮させるための栄養管理。これも牛群検定のデータがまさにドクターのカルテのように大きな参考資料となる。こうした取り組みを個々の酪農家がこまめに行うと必ず実現できると考えます。次に支出を2割削減させる。これこそ、牛群検定結果の登場です。飼料に無駄がないか。現在の牛の繁殖状況はどうかなどこまかなデータを瞬時に把握できる。こうして徹底的に無駄を省いた飼育管理により、支出を2割削減させることは必ずや実現可能な範囲だと思います。こうした細かなデータ分析は個々の酪農家の方々が行うことはなかなか難しいと思います。そこで、酪農アドバイザーがその役割を担い、酪農家さんの技術力の手助けをすることで可能になると私は考えます。そうです、目指すは「牛群検定でTPPに負けない酪農」。私の夢は大きく広がります。

.....

その昔、あれだけいやだった成績表も、今ではいやなものではありません。なぜならばそれは明日への道しるべだからです。私は現在高校3年生、私も自分自身の成績は自分指針の道しるべだと思い、日々の学習に取り組んでいます。そして、将来は牛達の成績表で、これからの日本酪農を支える一人になりたいと思います。

.....